

急激な転換点！ アルメニアの虚言 症と真実

資料文書



Charged as Armenian avengers

By KEVIN R. CONVEY
A suitcase at Logan Airport containing five sticks of dynamite and a timer was the link between alleged Armenian terrorists arrested in Boston and Los Angeles Friday night in a hush-hush terror bombing investigation.



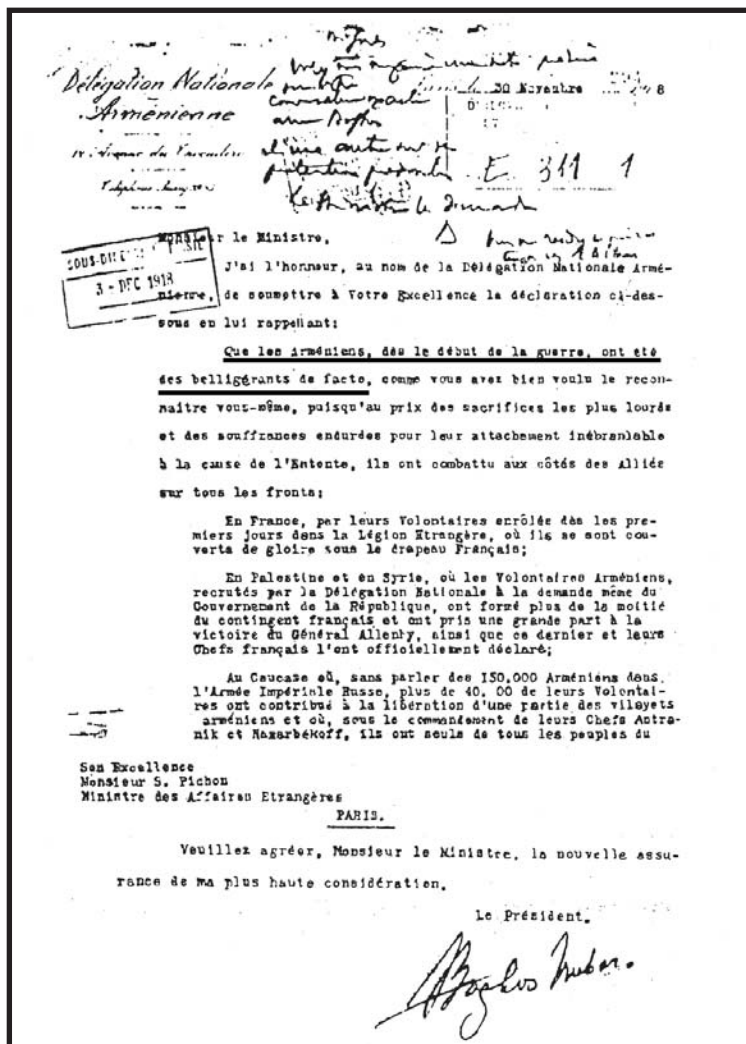
© エーリッヒ・フェイグル

prof.erich.feigl@chello.at
www.monarchie.at

「現在を制するものは過去を制する。
過去を制するものは未来を制する。」
ジョージ・オーウェル 「1984 年」

虚言症(ミトマニア)とは、虚偽陳述の病的な常用に特徴付けられる精神疾患である。中傷と、一世紀以上に渡って広められてきた「トルコ人がアルメニア人に対して虐殺を行なった」という、既に九十年の歴史をもつ伝説と考慮すれば、今こそが、この誹謗に対して明白な文書と目で見える資料をもって反論すべき時だといえる。

ここに、彼らが自らを交戦国としていた事を裏付ける文書を示す。



「大臣閣下、

当方、アルメニア国家代表団の名におきまして、閣下にこの宣言を提出する栄誉に与り、また同時に、以下の事項を申し上げたく存じます。

アルメニア人たちが、この戦争の始めから、実質上の交戦国であることは閣下ご自身も認めておられますが、彼らはすべての前線において連合国側とともに戦い、協約への揺るぎない忠誠を果たすために甚大な犠牲と苦痛を忍んでおります。

フランスにおいては、当初の日々に外人部隊に加わった義勇兵たちは、フランス国旗の下に栄光を身に受けます。

共和国政府の要請で国家代表団によって募集され、フランス分遣隊の大勢を占め、アレンビー將軍の勝利において重要な役割を果たしたアルメニア義勇兵のいるパレスチナやシリアにおいては、將軍自らや、また他のフランス人長官たちも正式にこう明言しています；

帝政ロシア軍の構成員である150. 0

00人のアルメニア兵のほか、40. 000人以上の義勇兵がアルメニア県部の解放に貢献した。アントラニクとナザルベコフの指揮のもと、コーカサスの人々の中で彼らのみがボルシェビキの撤退から休戦の調印までトルコ軍に抵抗し戦ったのだ。」

外務大臣

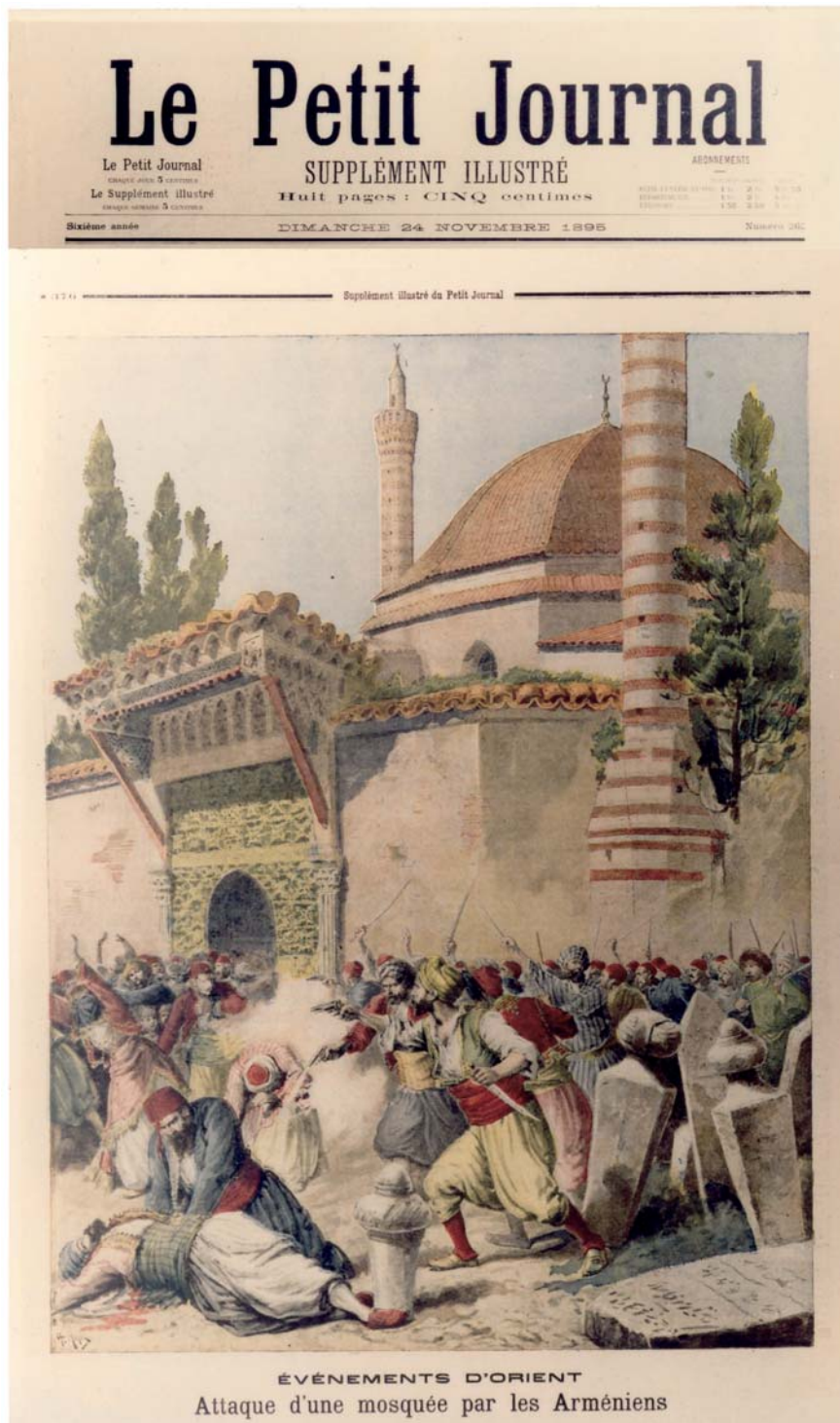
S. ピション閣下

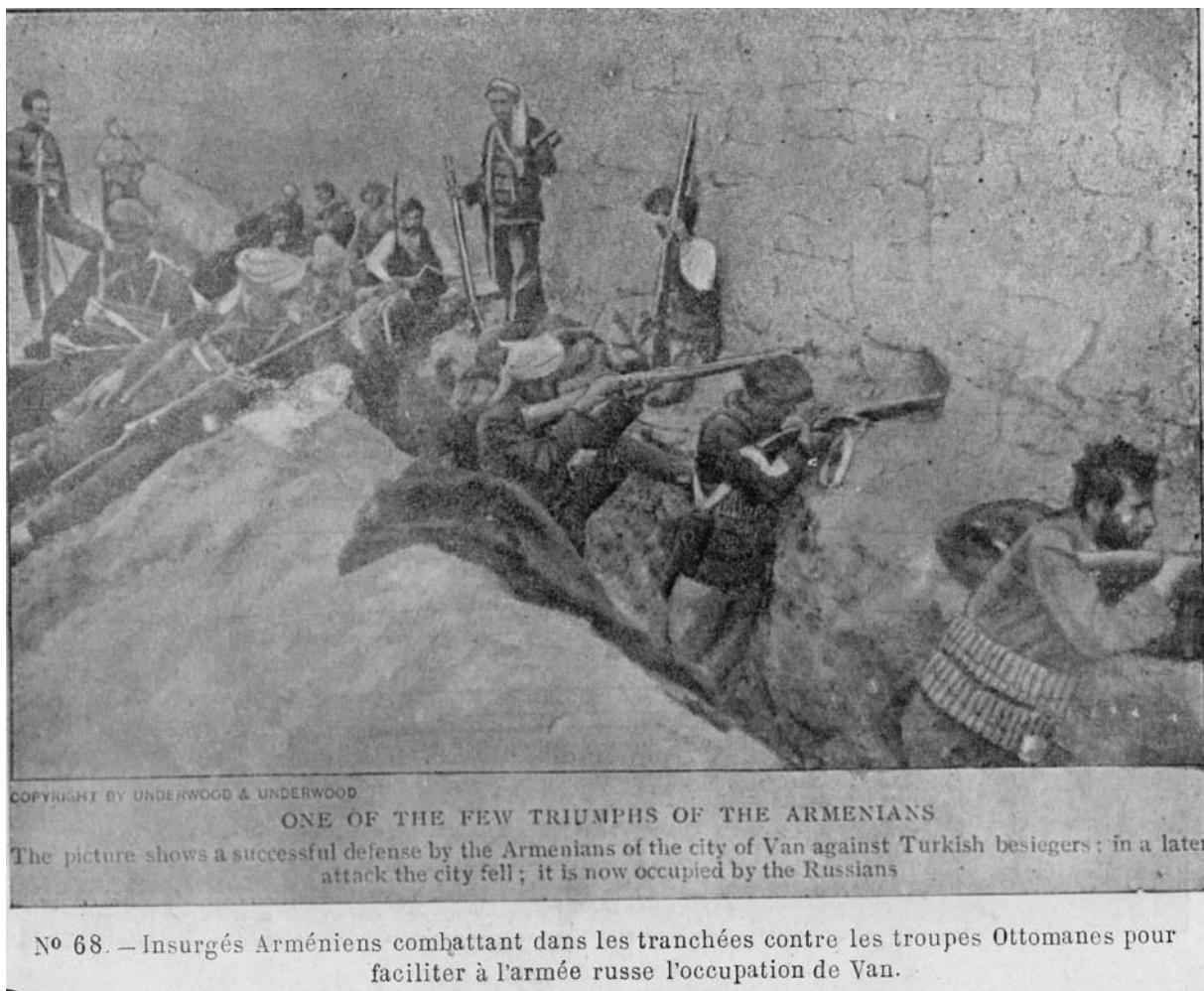
大臣閣下へ、あらためて最高の敬意を表する次第でございます。

議長

ボゴシ・ヌバル

アルメニアの狂信者たちは、既に一世紀半にわたって世界をテロ行為で脅かしていた。その活動は、その国内でプロテスタントやグレゴリオ(カトリック)信徒、またダシュナク党やフンチャク党といったアルメニアの政治団体が不法な暴力行為によって世界を誤った方向へ導いていたオスマン帝国で開始された。アルメニア人のテロ行為への恐れから、その事実について口を開く者はごくわずかであったし、現在もその状況は続いている。名作「ダル・ウル・イスラム」の作者であるマーク・サイクスは、当時のアルメニアの策謀を見出した人物ともなった。また、「LE PETIT JOURNAL」誌もその現状に敢えて光を当てた。

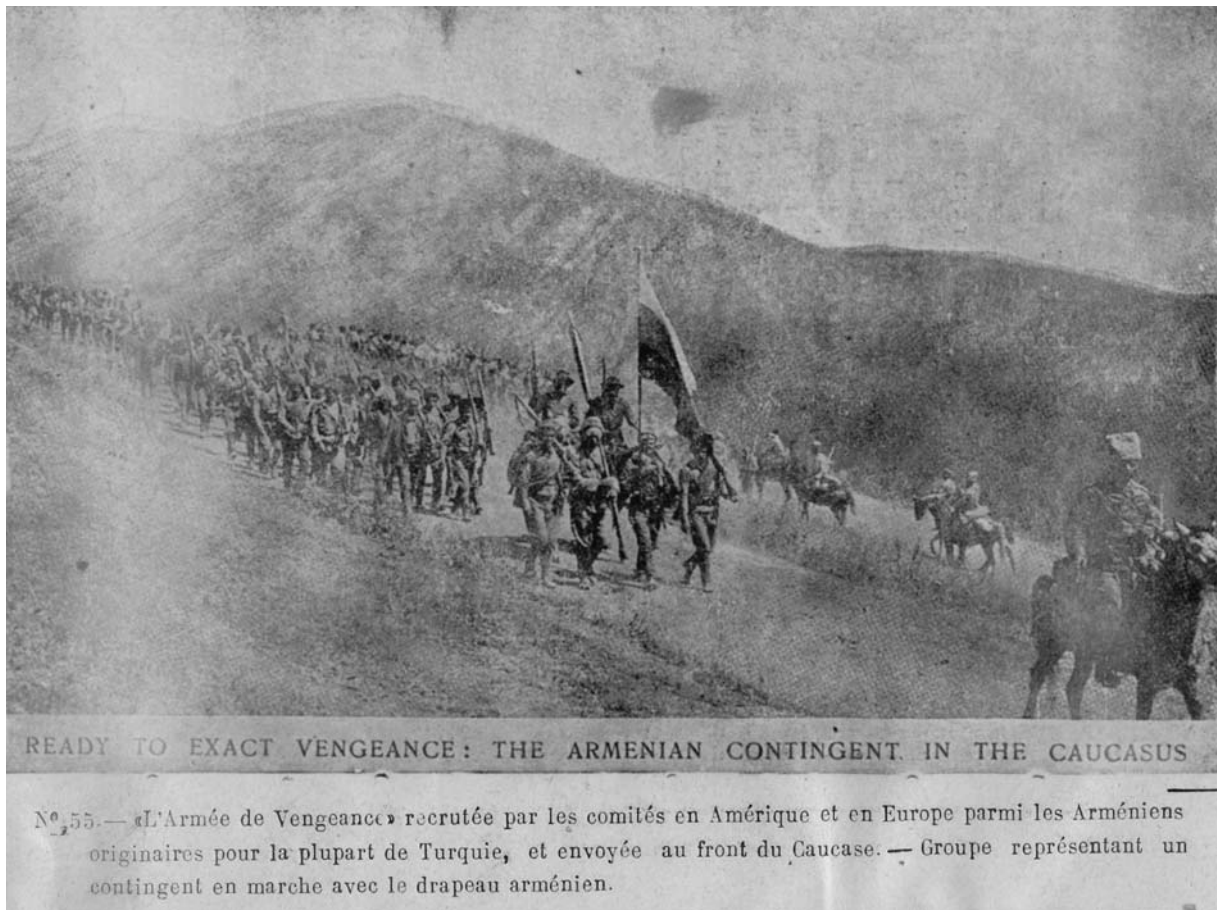




1914年の開戦とともに、事態は劇的に展開する。オスマン帝国内のアルメニア人たちは、トルコ後方部隊で目的を持ったサボタージュを希求する。フランスやロシア、その他の数力国で、五つの戦線の戦いに関わる、トルコに対するアルメニア義勇兵の強固な同盟が組まれた。「実質上の交戦国」は、およそ数千年の間ただ恩恵のみをもたらしてきた自らの地に対し、狡猾かつ冷酷な戦いを開始したのだ。前述の、アルメニア人の指導者ボゴシ・ヌバルがパリの外務大臣に宛てた手紙(1918年)は、真相を示す証拠である。彼らは戦争を行っていたのだ。



添付の写真(1915年春撮影)は、オスマン帝国の防衛線からのヴァン奪取を容易にすべく戦線を開いたロシアによって供給された火器で武装したアルメニアの反乱兵たちである。



「アンダーウッド&アンダーウッド」は当時の米国における非常に重要な報道機関であり、同社が全世界に配信した写真は信用に足るとみなし得るものだ。アルメニア人たちの暴動は1915年の2月から3月に開始した。オスマン帝国前線後方のヴァンでの侵攻や、アルメニア義勇兵のデモ行為に関する真実を示す数多くの写真が、こんな見出しとともに米国や英国の報道機関に取りあげられた。「復讐の時が来た:コーカサスのアルメニア人分遣隊」ここで疑問が生じる。「**何に対する復讐なのか?**」オスマン帝国でアルメニア人たちが国家の重要な地位を占め、金融やビジネス、経済や貿易の機構を掌握していたことに対してだろうか。それとも、彼らが宗教上の自由を得ており、富裕層向けの学校を経営し、数々の特権を享受していたことに対してだろうか？

この写真は、フンチャク党義勇兵の派遣を示したものである。
 (「青年アルメニア」1915年 7月 20日掲載)





ヴァン近くの町セヴスにある記念碑である。アルメニアの武装勢力の暴力的な統治が行なわれた短い期間に殺されたトルコ人、クルド人のムスリム（イスラム教徒）6000人の犠牲者が、オベリスクの背後の、地面に掘られた穴の底に眠っている。トルコ東部の全域では、1915年の悲劇的な春にアルメニア人に殺害された無防備な人々の記念碑のない場所を見つけるのが難しいほどである。

「アルメニア人に対する虐殺が法廷に。タラト・パシャの審理」は、扇動者たちが勉強会などで用いる、読者を惑わせる厚顔な欺瞞の典型的なものである。アルメニアのテロリストによってベルリンで殺害されたタラト・パシャの写真の背景には、1915年の事件によるアルメニア人犠牲者を自動的に連想させるような、山積みになされた頭蓋骨の絵が用いられている。

この印象操作は疑いなく功を奏しており、本来の目標を達している。しかし、この「戦争礼賛」というヴァシーリー・ヴェレシヤギンの作品（モスクワ・トレチャコフ美術館所蔵）は、プロイセンとフランスの戦争の記録として**1871年（！！）**に描かれたものである。

Der Völkermord an den Armeniern vor Gericht

Der Prozeß Talaat Pascha



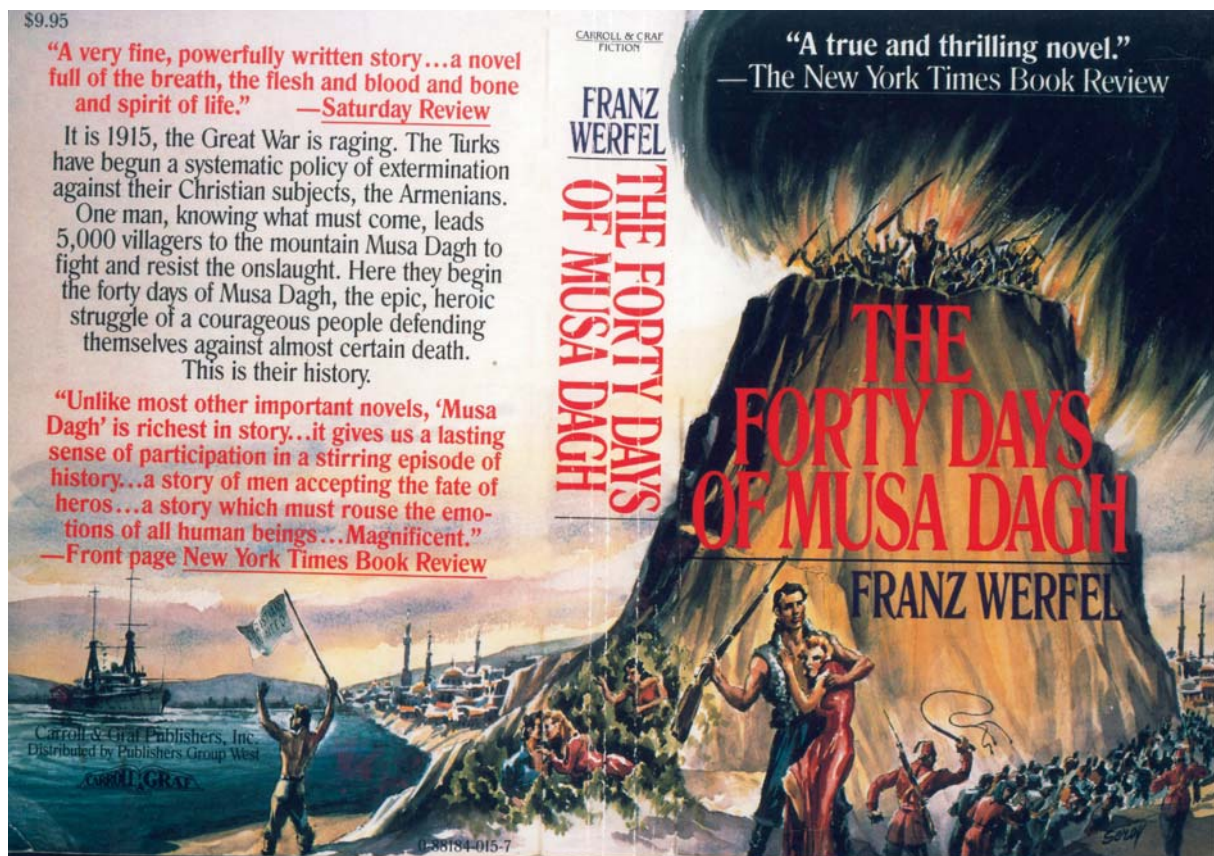
Neuaufgabe:

Herausgegeben und eingeleitet von
Tessa Hofmann

im Auftrag der Gesellschaft für bedrohte Völker

Reihe pogrom

(1)



まったくの誤謬と歪曲によって成る「ムサ・ダグ山の四十日」という小説が、かなり以前から成功をもって世界を凱旋し、「下劣なトルコ人」像の形成に貢献している。しかし、これは偉大なオーストリアの詩人フランツ・ウェルフェル（この小説の作者）の過失ではない：彼はただ、アルメニアの詐欺師とぺてん師の一団によって虚偽の資料をつかまされた被害者なのだ。

現在もなお効力を発しているこの世界規模の欺瞞の舞台裏の中心人物は、青年トルコ党によって出されたとされている架空の殺害指令を本全体に詰め込んだアラム・アンドニアン、狡猾な捏造師で、その策謀が最近になって露頭したヨハネス・レピウス牧師、そして、アルメニアの忠実な代理人と同労者たちに囲まれ、盲目的にその見解を信用した元米国大使モーゲンソーの著書である。一盲目的に、であったと願いたい。さもなければ、彼もアルメニアのテロ行為の主唱者のひとりだったということになるからだ。

すばらしい本ではある。しかし、ウェルフェルの小説は現実とは何ら関わりのないものなのだ！

「**真実の、そしてスリル満点の小説**」？「**スリル満点**」ではある。ーしかし、**「真実」**ではない！

こんにち、「四十日」は米国や英語圏の国々の売店で、「フィクション:セックスと犯罪」のコーナーで売られているが、この本から、そしてフランス語版からも、ウェルフェルの誤りを反映した最も重要な箇所、たとえばヴァンの暴動などに関するくだりが密かに抹消されたことを知らない読者は多い。新版には手が加えられている。そして、背後にいるマフィアたちは、なぜそのような作業が行なわれたかを熟知している。

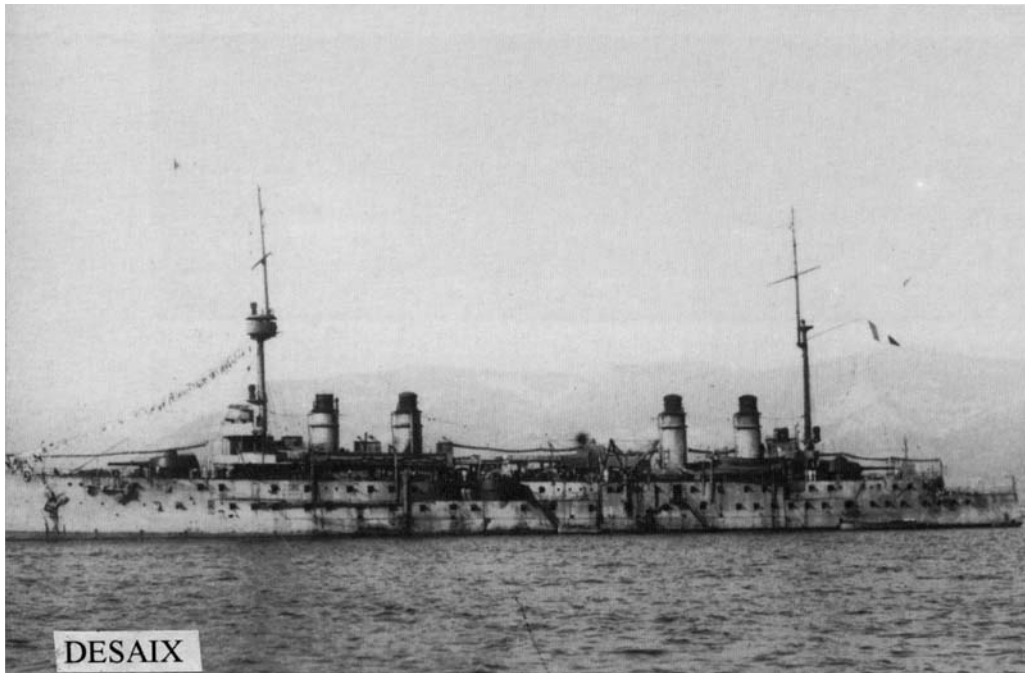
外的な効果を意図してデザインされたこの本の表紙の誤りを訂正するのは難しいことではない。

1. ムサ・ダグ山は火山構造の山ではない。むしろ、穏やかな山地の地形を呈している。この場所でも、またオスマン帝国の他の場所でも、入植者への鞭打ちは行なわれていなかった。トルコの法規ではそうした行為は厳しく罰されていたのだ。反乱者たちがSOSの合図として使ったとされるシーツの話(“災難にあるキリスト教徒たち”)も滑稽である。フランス海軍の装甲艦や輸送船は、貴重な積荷を安全な場所に輸送するために既に出航していた。スエズ戦線で戦う何千もの熱狂的な戦闘者の問題があったからである！
2. 状況は次のようなものだった：ムサ・ダグ山の「英雄」たちは、キプロスやエジプトの英国軍やフランス軍のキャンプで軍事訓練を受け、戦闘のためにシリアに行き、短期間滞在したが、彼らが甚だしい職権濫用を行なったため、協商国は彼らを撤退させた。ロシアの前線でも状況は同様で、彼らはツアーリの指揮から外れつつあった。

これは、英仏軍がムサ・ダグ山の「犠牲者」たちに、前線での戦闘につくための軍事訓練を行

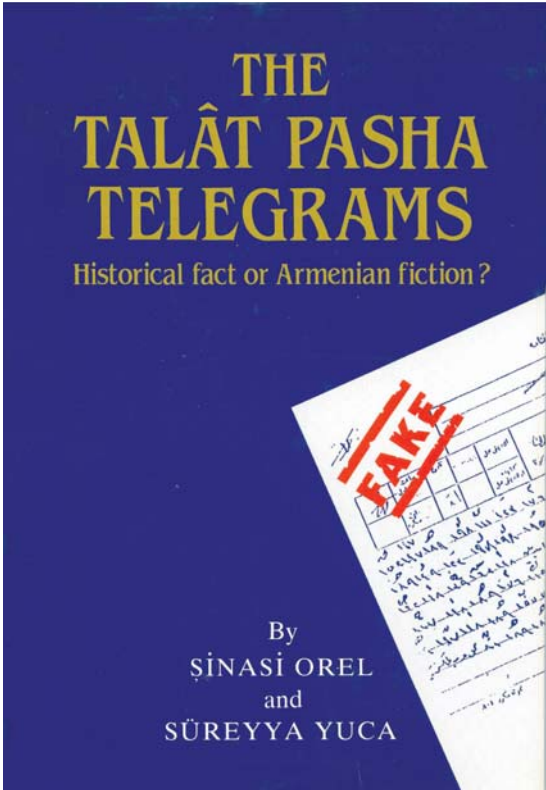


なっているキャンプの写真である。パリの歴史博物館（Musée d'Histoire Contemporaine）で発見されたこれらの写真は、記録文書から「不快」な資料を組織的に「取り除く」アルメニア勢力の目から逃れたものである。



添付写真は、当時のオスマン帝国において最も脆弱な地域だったアナトリアとシリアの間を航行する海軍の旗艦、戦艦「DESAIX」である。当地でのアルメニア人たちの使命は(ヴァンの場合と同様に)トルコの戦線にひびを入れ、欧州軍の攻撃を容易にすることだった。

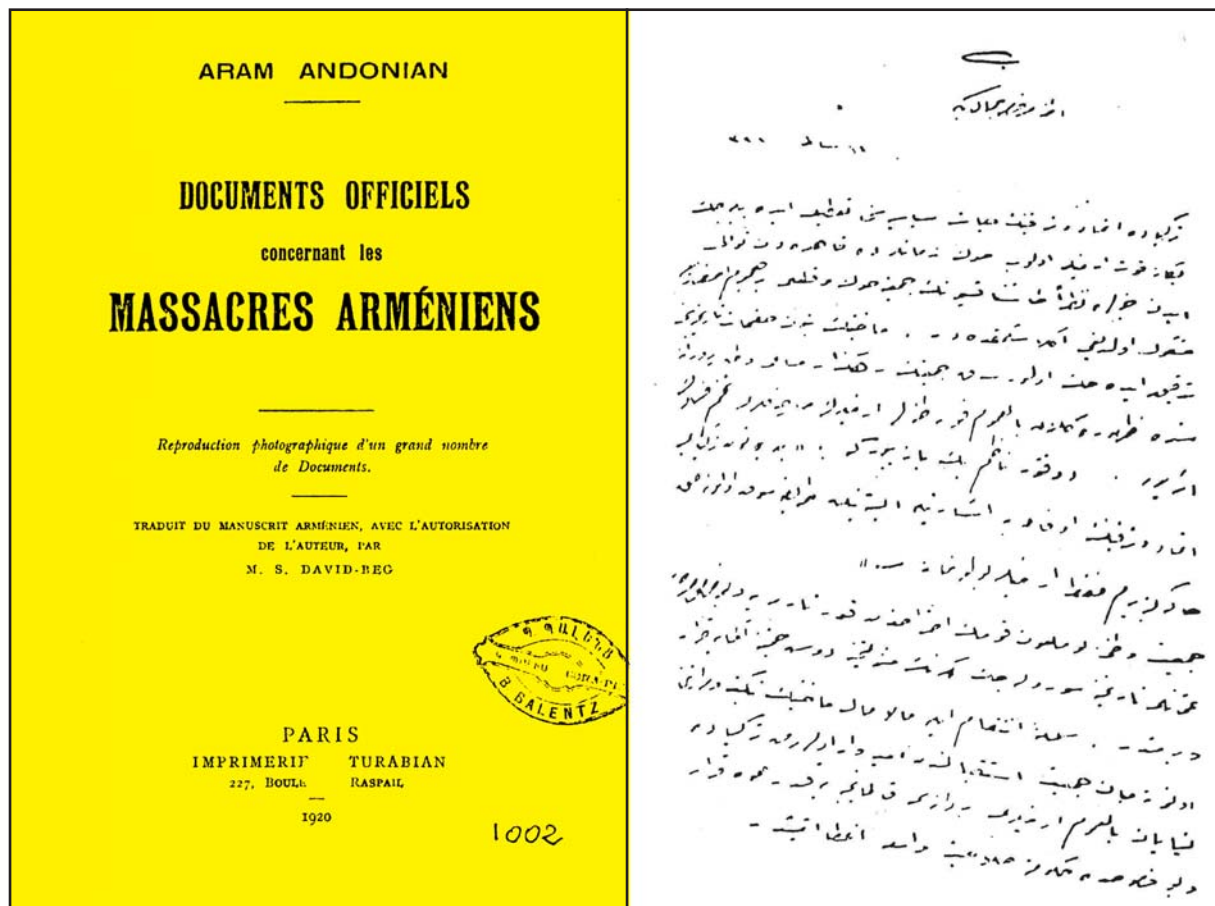
そして、これらの艦で召集連絡の手段に使われていたのはシーツなどではなく、当時の最も進んだ無線機器である。



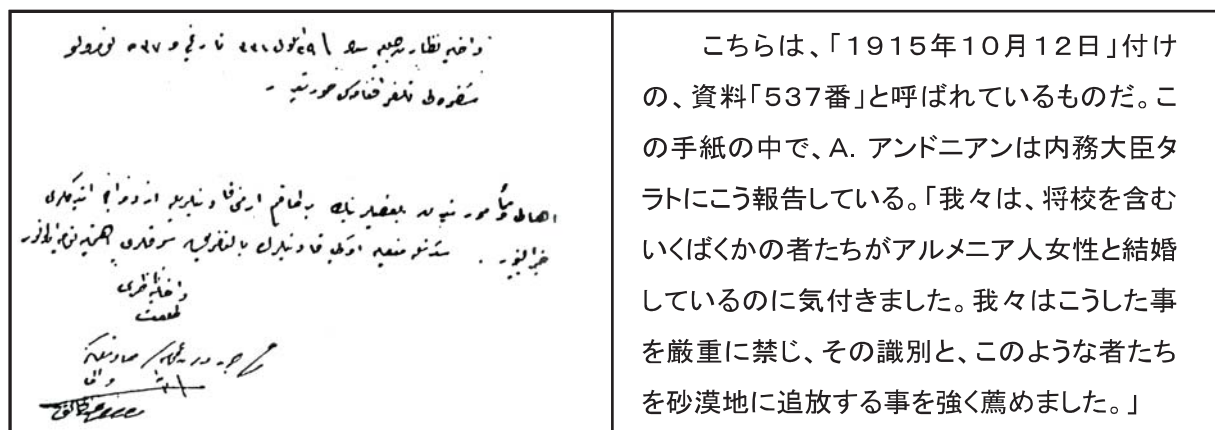
**THE
TALÂT PASHA
TELEGRAMS**
Historical fact or Armenian fiction?

By
ŞİNASİ OREL
and
SÜREYYA YUCA

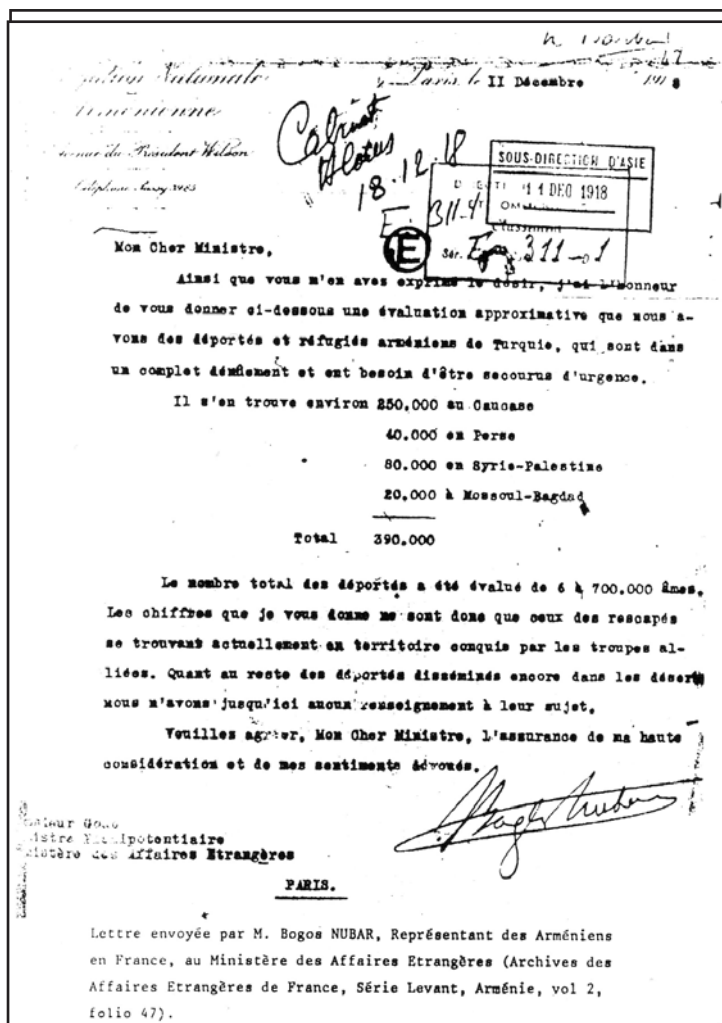
終戦後、アルメニアの捏造者たちは、ジョージ・オーウェルの「1984年」にえがかれる「真実省 (Ministry of Truth)」に予測されているような歴史の歪曲を開始した。実在しない「殺害命令」を偽造したアラム・アンドニアンによる工作は、この時代の典型的な所業である。しかし、シナシ・オレルとスレヤ・ユカはこれらの捏造を著書「タラト・パシャ電報」によって暴露している。「作り事だ」―「偽造されたものだ！」



アラム・アンドニアンによって捏造された、1331年2月18日(1916年3月2日)と日付のついた手紙をここに取りあげる。手紙は、「ビスミッラー」という言葉で始まるが、ムスリムならこんな書き方はしない。しかし、アンドニアンの最も致命的な誤りは、手紙の日付である。オスマン帝国で用いられていたルミ暦の再算出法についての知識が乏しかった彼はルミ暦とキリスト教暦の間の13日の差異についての考慮を忘れ、間違った年(実際は1917年2月)を記したのだ。彼は1331年ではなく1330年と書いたのだが、この手紙の内容は前もって計画されていた再入植を「証明」するためのものだった。・・・だが、この資料の日付にはそれでも丸9ヶ月(!)の狂いがある。



そして、実際の犠牲者数に関してはどうか。ここに、パリのアルメニア人代表団難民問題指導者のボゴシ・ヌバルによって作成された、反駁不能な資料がある。



「親愛なる大臣閣下、
ご要望にもとづきまして、緊急の
援助を要するトルコからのアルメニア
人入植者と難民のおおよその人数を
お知らせする光栄に浴します。

内訳は、およそ：
250. 000人がコーカサスに、
40. 000人がペルシャに、
80. 000人がシリアとパレスチ
ナに、

20. 000人がモスルとバグダッ
ドにあり、

計390. 000人
追放された者の総数は60万か
ら70万人と概算されております。お
知らせいたしました数字は、協商国
軍によって占領された新しい居住地
に最近になって移住した生存者の数
です。追放された残りの人々は荒涼
の地に散らされ、我々はその詳細な
消息も持ち合わせておりません。

親愛なる大臣、あらためて最高の敬意と挨拶をお受け取り下さい。

全権大臣

外務大臣

グーヴ閣下」

この手紙は、フランスのアルメニア人代表であるボゴシ・ヌバルから外務大臣に送られたものである。(フランス、中東区域、『アルメニア』外務省資料、2巻47ページ)

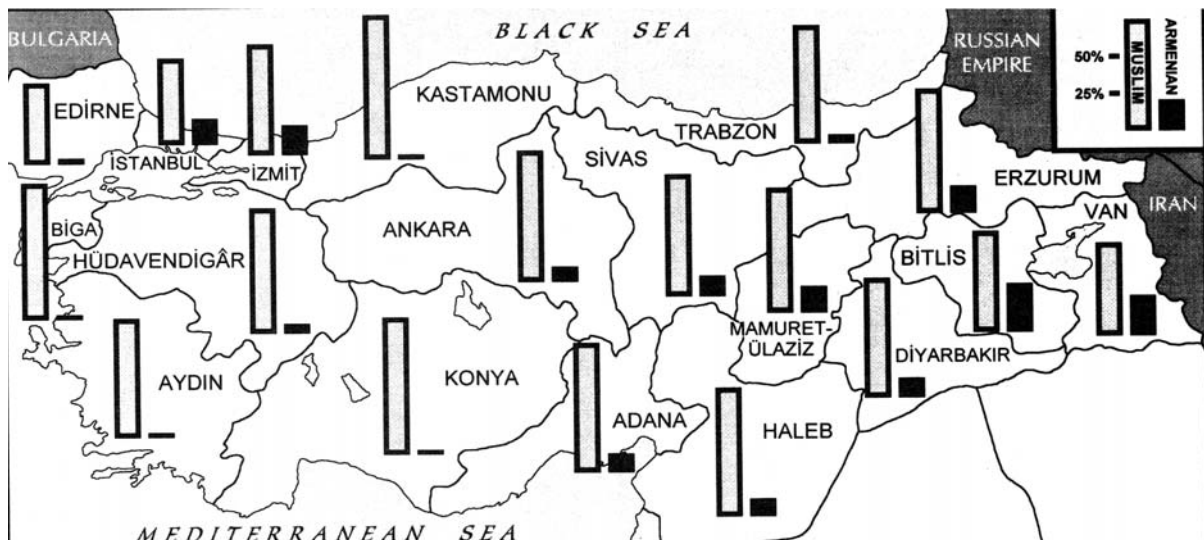
この文書には、アルメニア人入植者の犠牲者数は300. 000人であると明記されている。内戦期間中に命を落としたムスリム(クルド人、トルコ人やチェルケス人)の数は500. 000人と算定されているが、その犠牲はただ忘れ去られている。彼らについて語り、あるいは書く者はいない。ひとりのアルメニア人主教がある時述べたように、彼らは「無益なトルコ人たち」だからだ。

いくつかの事実

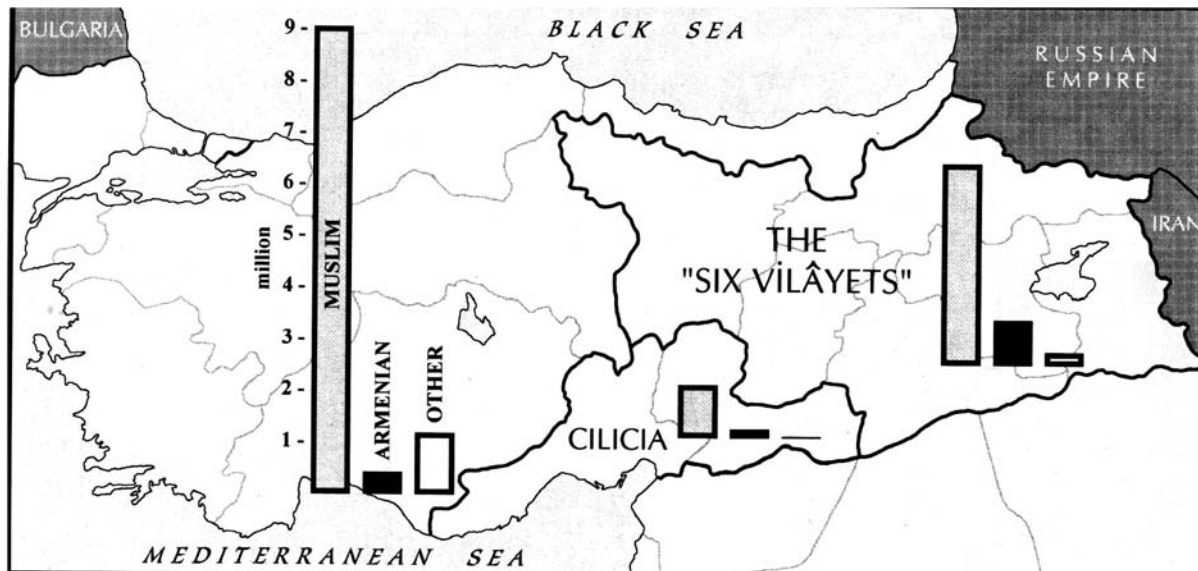
世界屈指の人口統計学者である、ルイスヴィル大学(米国)のジャスティン・マッカーシー教授は否定しがたい刊行物『ムスリムとマイノリティー — オスマン領アナトリアの人口と帝国の終わり』を出し、その調査結果を表に示している。どこに、どのようにして米国からのプロテスタント扇動者たちとアルメニア人狂信者たちがプロテスタント・アルメニア国家を設立しようとしたかという問題がおのずと影を落としている。

表2. オスマン帝国におけるアルメニア人の人口 1912年

	アルメニア 人 人口	総人口	アルメニア 人の 比率 (%)	1 南部アナトリア	2	3	4
1	2	3	4				
ヨーロッパ				南部アナトリア			
イスタンブール	162,132	1,032,839	8,8	アダナ	74,930	666,578	11,2
エディルネ	33,650	1,426,632	2,4	ハレブ	123,129	1,189,678	10,3
セラニク	87	1,437,915	*	東部アナトリア			
ヤンヤ	0	560,835	*	ビトリス	191,156	611,391	31,3
マナステイル	9	1,064,789	*	マムレウルアズィズ	111,043	680,241	16,3
イスコドラ	0	340,455	*	ディヤルバクル	89,131	754,451	11,8
コンヴァ	0	1,602,949	*	ヴァン	130,500	509,797	15,6
セザイル	140	359,474	*	エルズルム	163,218	974,196	16,8
西部アナトリア				シリア			
フダヴェンディガル	97,616	1,919,789	5,1	スリエ	1,768	1,017,322	2
アイディン	25,059	2,194,419	1,1	ベイルート	4,010	979,702	4
イズミト	69,225	389,490	17,8	セベリルブナン	6	235,169	*
ビガ	2,805	183,077	1,5	クドゥシシェリフ	2,340	352,813	7
北部アナトリア				ゾル	283	83,120	3
カスタモヌ	13,702	1,350,390	1,0	イラク			
トラブゾン	68,326	1,505,490	4,5	モスル	100	850,000	*
中部アナトリア				バグダッド	500	1,400,000	*
シヴァス	182,912	1,472,838	12,4	バスラ	50	1,200,000	*
アンカラ	125,616	1,444,139	8,7	アラビア			
コンヤ	24,856	1,690,388	1,5	ヒジャズ	0	2,500,000	*
				イエメン	0	5,000,000	*
				帝国	1,698,301	38,899,366	4,4



添付資料は、信仰する宗教に基づいたアナトリアの人口比率を反映したオスマン帝国地図である。オスマン帝国には、「民族」、そして「人種」による区分さなかったのだ。



オスマン帝国のキリスト教徒人口を構成していたのはギリシャ人とアルメニア人であり、その事実は図のデータでも証明されている(J. マッカーシーはこの資料をトゥカイ・アタオフの『後期オスマン時代のアルメニア人たち』[アンカラ、2001年]から写している)。

「アナトリア6県」(県[ヴィラヤト]とはオスマン帝国の行政区分である)という地名と共に用いられることの多いアナトリアの地図を見ると、事前に全てのムスリムたちを駆逐する計画がない限り「プロテスタント」アルメニア国家の設立という考えはまったくの幻想だという事が明確になる。同様の方針は、アゼルバイジャン人を、彼ら自身の土地から追放するという形で現在も劇的な規模をもって追求されている。

アルメニア人が主な住民であるかのような「アナトリア6県」の定義は、妨害やテロ行為、戦争に関心を持つ集団によって考案されたものである。ここでJ. マッカーシーも実情を明らかにしている。「アルメニア」および「アルメニア人」という語に関するの深刻な誤解があるのだ: アルメニアとは、アメリカなどと同様、大きな地理的定義である; ブラジル人、マヤ人、エスキモーなどが、米国市民として同じ「アメリカ人」とされる。同様のことが、「ハイク」(アルメニア人たちの自称。『ハヤスタン』は東部アナトリアに置かれていた彼らの共和国)やトルコ人、クルド人、グルジア人や他の少数民族集団が居住するアルメニアにも適用される。

ここに、「アナトリア6県」の人口に関する典型的な操作を挙げる: アルメニア代表団が第一次世界大戦後にパリの協商国政権へ提示した「アルメニア主教の統計」では、1,018,000人のハイクと他のキリスト教徒165,000人に対し、ムスリムは666,000人のトルコ人、その他チェルケス人、ラズ人、クルド人遊牧民、クルド人定住民など総計1,432,000人となっている。彼らのこの「資料文書」はまったくの偽物であることが分かる。前にも述べたように、オスマン帝国では、人口調査は民族をもとに行なわれることはなく、宗教的な原則によっていたのだ。

オスマン側の統計では、アルメニア人は784,917人(19%)で、他のキリスト教徒は176,845人(4%)、ムスリムが3,173,918人(77%)となっている。

表5. アルメニア人生存者

アルメニア人生存者の移民先	人数	アルメニア人生存者の移民先	人数
ソビエト連邦	400 000	シリア	100 000
ギリシャ	45 000	レバノン	50 000
フランス	30 000	イラク	25 000
ブルガリア	20 000	パレスチナ／ヨルダン	10 000
キプロス	2 500	エジプト	40 000
他の欧州諸国 *	2 000	イラン	50 000
北米	35 380	その他+	1 000

難民総数	810 000
トルコ残留者	70 000
総計	880 000

* オーストリア、チェコスロバキア、ハンガリー、ユーゴスラビア、スイス、イタリア、英国

+ 日本、中国、インド、ラテンアメリカ

(出典: マッカーシー 『ムスリムとマイノリティー』)

ここに、「1915年」の煙幕はアルメニア人たちの反トルコ・反アゼルバイジャン宣伝運動、またアルメニア人たちの1989年の攻撃的な戦争行為とその悲劇的な結果を隠蔽している。

アルメニアによって占領されたアゼルバイジャンの領土 ナゴルノ・カラバフ地域

面積	4 388(平方キロメートル)
人口(1989年)	189 085
アルメニア人	145 450(76. 9%)
アゼルバイジャン人	40 688(21. 5%)
ロシア人	1 922(1%)
その他	1 025(0. 6%)

THE RESULTS OF ARMENIAN AGGRESSION



シュシャ地区

面積	289(平方キロメートル)
人口(1989年)	20 579
アゼルバイジャン人	19 036(92. 5%)
アルメニア人	1 377(6. 7%)
占領年月日	1992年5月8日

ナゴルノ・カラバフ以外の地区

地区	占領年月日	人口
ラチン	1992年5月18日	71 000
キャルバジャル	1993年4月2日	74 000
アグダム	1993年7月23日	165 600
フィズリ	1993年8月23日	146 000
ジャブライル	1993年8月26日	66 000
グバドリ	1993年8月31日	37 900
ザンギラン	1993年10月28日	39 500

アルメニアの侵略行為による犠牲者

死者	20 000
負傷者	50 000
行方不明者	4 866

破壊と損害

集落	890
家屋	15 000
公共建築物	7 000
学校	693
幼稚園	855
病院・保健施設	695
図書館	927
(諸宗教の)寺院	44
モスク	9
歴史的な名所	9
史跡・博物館	464
博物館の所蔵品	40000
工業・農業事業所	6 000
道路	800km
橋	160
水道管	2 300km
ガス管	2 000km
送電線	15 000km
森林	280 000ha
農耕地	1 000 000ha
給水システム	1 200km

被害総額は600億USドルと見積もられている。

アゼルバイジャンの詩人や作曲家たちの記念碑の変わり果てた姿には、恐怖を禁じえない；それらの像は反撃作戦時に発見された。像の顔面には、あたかも軍隊が占領地域の真の姿を示すものをすべて拭い去ろうとしたかのように、激しい打撃が加えられている。

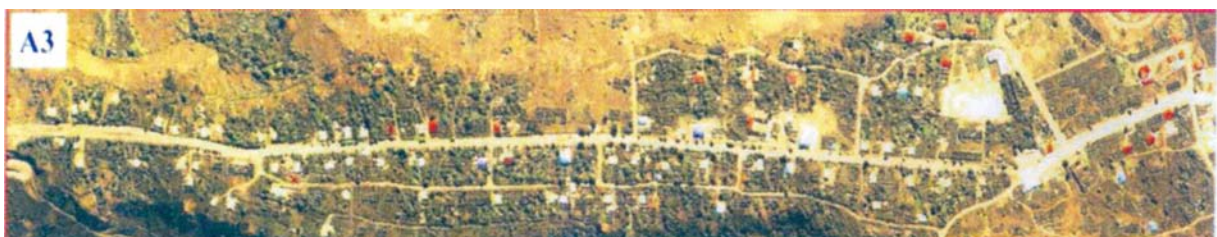
住民の強制退去のみならず、罪なき人々への大量殺戮をも伴ったアゼルバイジャンの町ホジャリの破壊は、万人の侮辱に値し、またその残虐さにおいてヒトラーやスターリンの時代にも匹敵する行為として、世界的に知られる事件となった。





これらの資料は、アルメニア人によって占領された地域を衛星から撮影した写真の代表的なものである。この衛星写真に写っているのは、アゼルバイジャン南部のナヒチェバンに近いグバドリの町である。大規模な軍事施設、戦車、軍用機の発着場などがはっきりと見える。2005年3月にカラバフおよび他の占領地域を訪問したOSCE（欧州安全保障協力機構）の代表団は、アルメニア人たちによって無残に蹂躪されたアゼルバイジャンの村々、農場、集落の光景を目にした。それはアゼルバイジャンに由来するすべてのものを拭い去り、文字通り、そして比喩的な意味でも、侵略戦争の痕跡を覆いつくそうという試みである。

一世紀が過ぎた現在もアゼルバイジャン人たちは、ツァーリ・ロシアを味方につけたアルメニア人たちがバクーで権力を掌握し、そしてアゼルバイジャンの石油を収用すべく1905年に仕掛けてきた最初の公然たる侵略行為による数千の犠牲者たちを追悼している。この当時の写真は、ついにはロシア人をも恐れさせ、その攻撃を中止したほどの殺戮の大規模さを証拠付けている。



別のこの写真は、占領者たちへの軍事物資の輸送を写している。占領軍が用いるための武器や弾薬、また、数においてそれに勝る新たな入植者たちを運ぶアルメニア人たちの貨物自動車の終わりのない列が、不法に占拠されたアゼルバイジャンの領土内で伸びている。



これはアルメニア人が1905年に暴動を起こしたシュシャの歴史的な写真である。侵略が最初の高まりを見せた瞬間だった。



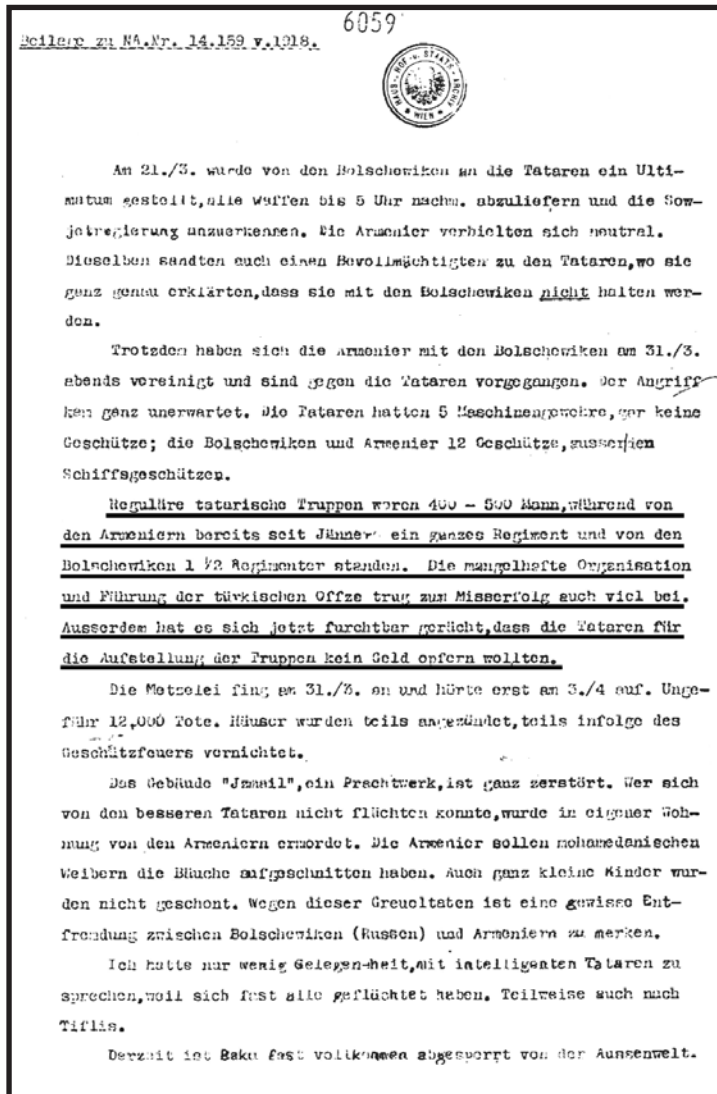
1905年の事件は、アゼルバイジャン全体を奪取しようという企ての、ほんの前奏であった。この13年後にバクーで起こされた破壊行為のあとに撮られた写真は、そのことを物語っている。

1918年の3月、全てのことが「より高い」水準で繰り返された: アルメニアの軍隊がバクーに侵入し、街の新たな支配者として留まった。20000人のアゼルバイジャン人が殺害され、現地住民たちはアルメニアの攻撃のなかで追放された。



この1918年のバクーでの事件に関しては、オスマン帝国内のオーストリア・ハンガリー政府の一員であるトラウトマンズドルフ伯によって劇的な報告書が作成された(当時、アゼルバイジャン人は外国語の語彙において『タタール人』と呼ばれていた。民族を貶めるための人工的な定義である: その豊かで独特な文化と、幾世紀にもわたってロシア人たちを撃退してきた能力にもかかわらず、タタール人は低級民族と見做されていたのだ)。

ウィーン国立公文書館の文書にはこう述べられている:



「3月21日、ボルシェビキはタタール人たちに午後5時までに武装解除し、ソビエト政府を承認するよう最後通牒を突きつけた。アルメニア人たちは中立的な態度をとっていた。彼らはタタール人たちに、ボルシェビキの一員であることへのアルメニア人たちの不本意を明確に表明する代表を送った。

それにもかかわらず、3月31日にアルメニア人たちはボルシェビキに加わり、タタール人たちを攻撃した。攻撃は突然に始まった。タタール人たちは5挺の機関銃以外、何の火器も持っていなかった:ボルシェビキとアルメニア人たちは、陸軍だけでも12の重砲を備えていたのだ。

タタールの正規軍は男400－500人を数えるのみであったが、アルメニア人は1月から一連隊を備えており、ボルシェビキは一個半の連隊を配置につけていた。トルコ将校

たちの不完全な組織ぶりも、彼らを失敗の運命へと導いた。

また、タタールたちが部隊編成への寄与をしなかったという噂もあった。

殺戮は3月31日に始まり、4月3日に終わった。およそ12000人の死者が出た。家屋も焼き討ちに遭い、また破壊された。

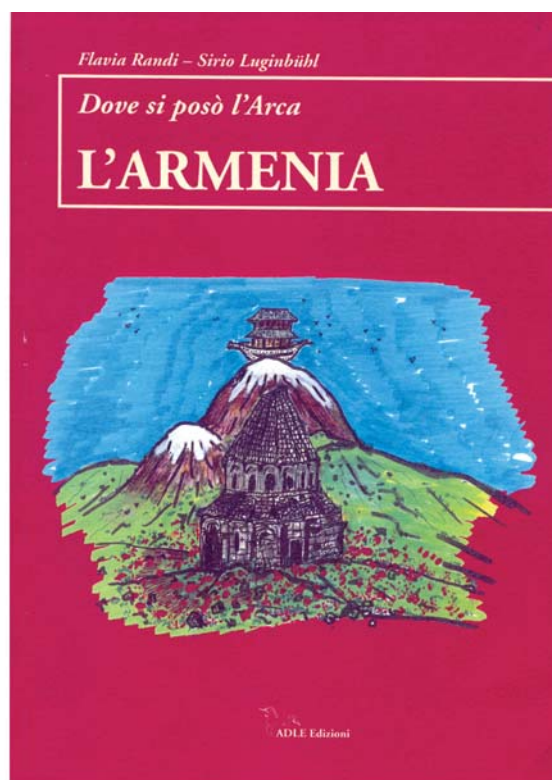
傑作といわれる建築物「イズマイル」も、完全に破壊された。逃げ遅れた者たちは、その自宅でアルメニア人たちによって殺害された。アルメニア人たちはイスラム教徒の女性たちのほらわたを引きずり出した。子どもたちにも容赦はなかった。ボルシェビキ(ロシア人)とアルメニア人の多少の離反から、これらのあまり知られぬ犯罪行為が起こる結果となった。

多くの者が避難していったため、タタールのインテリゲンツィア(知識層)と話す機会はずいぶん少なかった。チフリスに逃れた者もいた。

現時点では、バクーは外界から全く遮断された状態である。」

アルメニア人たちの攻撃性は、国家のイデオロギー的本質である。この奇妙な共和国の紋章を一瞥するだけでも、それは十分理解しえる。なぜなら、その紋章はこの国が戦争、テロ、欺瞞と征服行為に自己の存在意義を見出しているという事実を裏付けているからだ。

アルメニアとは言語的にも歴史的にも何ら共通点を持たない「アララト山」は、ノアの箱舟が着いた地だとされている。この説の正確さ、又は不合理性についてここで検討するのは控えるが、問題は、アルメニア人たちが自らをノアの子孫と自称する時、事態は攻撃的・政治的な方向性を帯びるという点だ；しかし、この考えが事実と確認されたなら、その特権はハイクたちのみならず、他の全ての人々にも適応されるものとなるのだが。



その上、アララトはトルコ領内にある山である。ポーランド人が自国の紋章にブランデンブルク門を刻んだとすれば、ドイツ人はどう反応するだろうか？ブンデスターク・ドイツ連邦議会議事堂にエッフェル塔の意匠が、あるいはロンドンのタワーブリッジに三色旗が用いられた場合のフランス人はどうであろうか？考えられないことである。こんにち、もはや槌と鎌（ソビエト連邦国旗の意匠）は存在しない。アララト山と箱舟がそれに代わるものだ。



気がかりな質問：

なぜ、政治家たちのうちには、戦後の1946年に殺戮された数十万人、追放された三百万人のドイツ人についてではなく、1915年の事件に関して、まったく知識を持たず、かつ確信をもって語ることをできる人々がいるのだろうか？



答えは簡単である。ある人々は、いかなる代償と手段を以ってしてもトルコのEU(欧州連合)加入を妨害しようとしており、しかし同時に「ベネッシュ令(ドイツ人追放令)が今なお有効であることに関しては、何事もなかったかの如く無視しているのである。

なお、ここで問題としているのは、トルコがEU加入を願っているか、またそれが必要かという点ではない…それはまた別の話だ。ここでの話の核心は、キリスト教徒の「人民の代表」たちが、1915年の事件に関して欺瞞によってアンカラを非難し、また実情について何も知らないことである；しかし彼らは、現在も進行中である、アゼルバイジャンに対するアルメニアの侵略行為については一言も語ろうとしない。何万人もの人々が殺され、百万人の難民がいるのだ！今日だ。いま現在だ！



トルコについてはどうだろうか。完全な包囲網とドイツの脅威にもかかわらず、トルコは第二次世界大戦中、アーネスト・ロイターなどを含む数万人の難民を受け入れ、誰に対しても追放行為を行なわなかった。それに対する謝意は、誹謗だった。

ウィーン、1984年6月20日： 1915年の悲劇的な事件から数十年後に生まれた、愛に値し、家庭と任務に心を注ぐ、トルコ人労働者の福利を担当する若い外交官が、トルコ大使館前でアルメニア人テロリストに殺害された。エルドガン・オゼン（1950年生まれである！）は私の友人であった。以後、私は平和の確立のため、歴史の真実を追究している。



急激な転換点が訪れた！アルメニア人の虚偽の宣伝活動と侵略行為に対する、トルコ人とアゼルバイジャンの抵抗が形をとり



2005年4月2日、ウィーン — アルメニア人によるアゼルバイジャン人虐殺追悼日に、「ハイスタン共和国」大使館前でデモが行なわれた。

1915年の事件の真実 — それは狡猾な内戦だった。

ムサ・ダグ山事件と、欺かれたフランツ・ウェルフェルに関する真実。

アルメニア人によって行なわれた、トルコ人とアゼルバイジャン人の大量殺戮の真実。

アゼルバイジャンに対する、アルメニア人の悪名高い侵略戦争。

トルコに対する、アルメニアの心理的および物理的なテロ行為。

アメリカ合衆国大統領の声明： 広報官室、2005年4月24日

「我々は、カラバフ紛争の平和的かつ永続的な解決の追求を約束する。私は平和、忍耐、そして和解の名のもとに働く全ての人々を高く評価する…」アルメニアのマフィアたちの、大統領に圧力をかけて米国内での「ジェノサイド」という語の使用を受け入れさせようという望みは失敗した。まったく対照的なことが起こったのだ。急激な転換は続いた。